

受験番号	氏名

令和6年度

貞静学園中学校

適性検査型入試【適性Ⅰ】

試験開始の合図があるまで、この問題用紙を開かず、下記の注意事項をよく読むこと。

注 意 事 項

1. 問題用紙は4ページです。解答用紙は別紙（1枚）になっています。
2. 試験開始の合図で、問題用紙と解答用紙に、受験番号・氏名を正しく記入すること。
3. 試験開始後、「問題用紙のページ数と解答用紙」を確認し、足りない場合は静かに手を挙げ、試験監督者に申し出ること。
4. 解答には、必ず鉛筆、またはシャープペンシルを使用し、解答用紙の記入箇所をまちがえないように答えを記入すること。
5. 必要があれば、ラインマーカーまたはボールペンを使用してもよい。
6. 試験終了の合図で、試験監督者の指示に従って解答用紙と問題用紙を提出すること。

1 文章1と文章2を読み、あとの問題に答えなさい。

(*印のついている言葉には「注」があります。)

文章1 筆者はお笑い芸人でもあり、映画監督としても活躍している。

最近になって、その頃の作品を見返すと、自分でも「ずいぶん「間」が長いな」なんて思うことがある。だからそれが成功したかどうかかわからないんだけど、そもそも正解がある世界じゃない。映画を撮りたいと思う人は、まずは専門の学校に行ったりするわけだろう。そこでいちおう「「間」はこのぐらいで、構図はこう」とか、ひととおりのことを習うけど、それが正解というわけじゃない。ないんだけど、それが常識として染み付いちゃうんだね。おいらはそれを壊そうとした。

例えば、人物を撮るシーンで平気で首から上を*フレームアウトさせちゃう。「首から下だけ撮ってくれ。首なしのまま歩くから」とカメラマンに指示すると、「それはまずい」と勝手に修正しちゃうんだよ。「いや、ここはそれでいいんだ」といくら言っても、カメラを上にあげてしまふ。それが映画の常識といえど常識なんだけど、それに縛しばられてる人も多い。それを見ると、日本人というのは、それまでのルールを壊して新しいものを創ろうという意識が低いのかなと思うね。違うこと、新しいことをやってみようという気はあまりないんだ。

しかも映画に限らず芸術の分野でこそ、どんどん新しいことにトライしていかなければいけないのに、かえってそういう世界の方が「これまでの常識や伝統を守る」という意識が日本では強いよね。もっとも自由なことをやるべき業界なのに、慣習や常識とらに囚とらわれている。

だから最初に、おいらがスタッフに「今まではそうだったかもしれないけど、おいらはこう撮ってみたい」とかいろいろ言っても、「それはあり得ない」「そんな撮り方は非常識だ」「それじゃ映画にならない」って結構抵抗ていこうがあつて、カメラマンも照明もなかなか言うことを聞いてくれなかった。その決定権は監督にあるし、どんな方法でやってもいいのにな。

しょうがないから、ときどきスタッフを騙だましちゃった。ライトを当てた俳優を主役だと思わせておいて、実は編集で別の俳優、ライトが当たってない方を使っちゃう。ラッシュを見て、「監督、あそこ照明が当たってないのを使っているじゃないですか」って照明さんが怒っちゃったけどね。それでいいんだよ。「ほかの奴に笑われますよ」とか言うんだけど、こっちははなからそこを相手にしていないから。

やっぱり日本人は、他人の目というのを過剰に気にするのかな。でも、それだと新しいものはつくれないだろう。

だから日本人が得意な「間」は、かえって新しいものをつくる妨げになるのかもしれない。「「間」がわかる」「空気が読める」は、全体をうまくまとめることにはなるけど、その分、角も丸くしちゃう。

なにか採め事を起こしても、「まあまあ」なんて収めてしまう。「ちょっと一服しようか」とかなんとか言って、とにかく「間」を置く。それでは自然に解決するのを待つ。本当はそこで丸く収めないで、そのまま沸騰つっとうさせることも、ときには大事なんだけどね。それなのに、一回引き返しちゃうから、壊すべきものも壊せないままなんだ。

それは最近のエンタテインメント全般で言えるね。いろいろ見ていると、盛り上げるのは若い人なんだけど、それをダメにするのも若い人たち。若い人が「おもしろい！」って集まってきて盛り上がるんだけど、しばらくすると潮が引いたようになくなっちゃう。

〈中略〉

その繰り返しだから、次々と「新商品」というか新人は出てくるけれど、それが本当に新しい*ムーブメントになっているかといえば、そうじゃない。日本のエンタテインメントに革命が起きているかという点、ただお客さんが飽きつぱいだけで、お客さんが飽きて卒業して、また新しい人が出てきて飛びついでと、その繰り返しだから、ただの再生産。古いものを壊して新しいものが出てきているか、微妙だよ。

(ビートたけし『間抜けの構造』)

フレームアウト……映画などで登場していたものが画面から

なくなる。

ムーブメント……動き、動作、運動のこと。

文章2

家を建てることは、ふつう大人になつてからする。

家の値段はお菓子やゲームの値段とはくらべものにならないほど高いし、カッコいいスポーツカーよりさらに高い。とても子どものおこづかいで買うことはできない。これが理由のひとつ。

結婚する、子どもができる、家族が増える。その結果いま住んでいる家が狭くなる。これも家を建てるきっかけとなる。この場合、家のかたちやデザインや間取りまどを考えるのと同時に、家族の将来のことも考えている。夫婦だけのときは赤ちゃんが生まれても、とりあえずはリビングともうひとつ寝室があれば十分だけれども、子どもが小学生ともなると部屋がもうひとつ必要だろうなあ、とかね(きみが生まれるずっと前からお父さんやお母さんはきみの部屋のことを考えていたんだよ、たぶん)。

家を建てるにはお金もいるし(お金を稼かせがなきゃいけないし)、じぶん(たち)のことだけでなく未来の家族の、そしてその家族の将来のことも考えなきゃいけないのだ。

子どものころ、だれもが人形の家をつくり空き箱や木切れをつかい、小屋遊びをしてすごく楽しかったはずなのに、大人になるとそうではなくなってしまうことがある。家を建てることは大人にとってはとてもやっかいな、ある時はつらい大仕事に変わってしまう。材料や窓や入口のことをいろいろ工夫したり、出たり入ったり寝転がったりして楽しんで

「愉快な家の経験^{けいけん}を忘れてしまって、どこにでもあるような家をつくってしまったりするものなのだ。本物の家をつくるのが子どものころの夢だったはずなのに。」

「ちょっと変わった家に住んでいるといじめられる。ほかの人と同じような家に住んでいないとはずかしいという話を聞くことがある。なんかヘンですよ。いろんな家があってあたりまえ、人はそれぞれ違った家に住んでいいはずでしょう？」

妹島^{せじまかずよ}和世^{かずよ}さんも子どもころは人形の家や空き箱で家をつくり遊んだ。そして大人になってからも①家をつくることを楽しんでる。もちろん建築家として家をつくるわけだから、じぶんの家のことではなくていろんな人が住む家だけれども。

妹島さんは家を考えるとき「人が使う」ということから考えはじめるといふ。いろんな人がいるから家の使い方もいろいろなはず。なんにもない家でごろんと横になって気持ちがいいと思う人がいれば、いろんなモノをあちこちに並べて楽しむ人もいる。ドーンと広いところが好きな人、狭い部屋^{せま}にひとりじゃないと落ち着かない人がいる。おじいちゃんやおばあちゃんから孫^{まご}やひ孫までひとつの家のなかに大勢でがやがや住みたい人もいる。それぞれに家の使い方は違っている。だから家のかたちやデザインや間取りが異なっていてあたりまえ。妹島さんはそう考える。

「だって洋服はみんな自由に好きなものを工夫して着ているじゃないですか？」

寒い冬なのに我慢^{がまん}してノースリーブを着たりする自由がファッションにはある。お行儀^{ぎょうぎ}がいいと思われたいからみんなと同じ、目立たない服で学校に行ったりするのなんかいやだ。そんなにたくさんではないおこづかいの中から、なんとか買った洋服を工夫して組み合わせてじぶんだけの着こなしで街を歩いた。妹島さんは大人になっても中学時代に楽しんだ着こなしの自由を忘れていない。

（妹島和世『物語のある家』鈴木明「洋服を選んだり合わせたりするよう家を作れたらいい……」）

<令和6年度入試>

〔問題1〕

文章1から読み取れる筆者の考える日本人の短所を四つ挙げなさい。

〔問題2〕

文章2「^①家をつくることを楽しんでいる」とあるが、妹島さんはどのように家をつくることを楽しんでいるか説明しなさい。

〔問題3〕

文章1と、**文章2**を読んで、あなたは新しく始まる中学校生活をどのように過ごしたいと思いますか。あなたの考えを書きなさい。なお、内容のまとまりやつながりを考えて段落に分け、四百字以上四百四十字以内で述べなさい。ただし、次の〔きまり〕にしたがうこと。

〔きまり〕

- 題名は書きません。
- 最初の行から書き始めます。
- 各段落の最初の字は一字下げて書きます。
- 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。会話を入れる場合は行をかえてはいけません。
- 「、」「や」「。」「や」なども、それぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭にくるときには、前の行の最後の文字と同じます目に書きます。（まず目の下に書いてもかまいません。）

○ 「。」と「」が続く場合には、同じます目に書いてもかまいません。この場合、「」で一字と数えます。

○ 段落をかえたときの残りのます目は、字数として数えます。

○ 最後の段落の残りのます目は、字数として数えません。

